

手柄山温室植物園だより

シリーズ：姫路市に見られる身近な植物

4 1. フユノハナワラビ（ハナヤスリ科ハナワラビ属）

Botrychium ternatum (Thunb.) Sw.

2015年11月

日当たりのよい畦畔やため池土手などに生育する冬緑性の多年生シダ植物です。生育期間は8月ごろの出芽から翌年の3月ごろまでで、胞子は10～11月ごろに熟します。高さ10～40 cm以上、根茎は短く、太い根を多数出し、葉は年に1枚出します。葉は担葉体、栄養葉、孢子葉の部分に分れ、担葉体は栄養葉と孢子葉の基部が共通の柄になっている多肉質部でハナヤスリ科特有の器官で、本種は長さ2～4 cm程度です。栄養葉は暗緑色でやや薄く草質で、葉身は3出状で3～4回羽状に深裂し、ほぼ五角形で長さ5～10 cm、幅8～12 cm、鈍い鋸歯縁は種の同定の重要な要素で、鋭鋸歯をもつオオハナワラビ (*B. japonicum* (Prantl) Underw.) との大きな違いです。孢子葉は栄養葉より長く、柄は長さ12～25 cmで穂は円錐状で長さ4～10 cm、2～3回羽状に分岐します。分布は北海道（渡島）、本州、四国、九州、朝鮮、中国、台湾で、姫路市においても広く見られます。冬季には多少赤みを帯びますが、赤銅色になる個体もあり、最近の研究では雑種起源の可能性が疑われる個体も多く確認されます。



フユノハナワラビ（栄養葉と孢子葉）



冬季の着色状態